

# イチゴのトンネル栽培

中原 忠 夫

## 寒地でのトンネル栽培の可能性

府県においてはビニール利用の促成抑制栽培が急速に伸びて来ているにもかかわらず、北海道には省みられていない。その理由として、気候的な条件と労力の問題、更に市場性で、かりに労力、資材を多くかけて早めに生産したとしても、輸送園芸の発達によつて府県ものが格安に出廻る等によるものと見られている。しかしながら輸送の困難なもの、鮮度の特に要求されてしかも需要の多いもの等についてはどうだろうか。

東京等の大都市を中心とした野菜の作付は単に都市近郊ばかりでなく、全般的に増加傾向を示していて、その生産量は道内野菜にも影響が大きくなつて来ている。従つて北海道でも否が応でも、出荷時期の調節というか、促成抑制面の研究開拓が必要になつて来ると思う。このような考えから農場ではトンネル栽培をいろいろと試みているがおもしろい結果を得たものがない状態にある。処で苺についてはある程度の採算がとれるのではないかと思う。

## 畑の準備

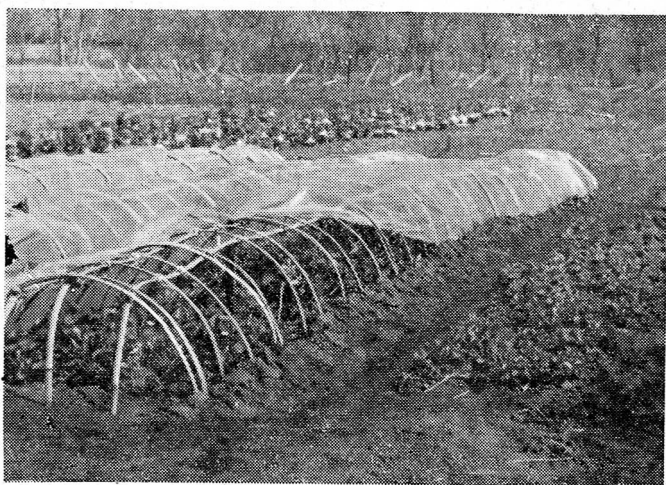
苺のトンネル栽培の方法として、一般栽培

培圃場の畦にビニールを覆う方法と、予め苗の植付から準備してかかる方法とがある。一般圃場に覆う方法は、ビニールの利用効率も劣り、かりに株栽培している場合でも二、三年株になると茎葉数が多いので徒長し易くなり、果実も小さくなるようである。古株は綿密な管理をしたとしても成熟は四日位おそくなるので、ビニールを被覆し易いように年々新株を植込むことが大切である。

更にトンネル栽培に当つて注意しなければならないのは風の点で、トンネルを古魚網で覆う事も一つの方法であるが、風の多い春先の事とて二、三十間のトンネルが風であられるような事になると、二人や三人では抑えようもなくなるものである。更に風のためにトンネルの開放が意にまかせなく失敗の原因となる。結局トンネル栽培の成否は風の害を最小限度に止めうるか否かといえるので、あらかじめ風当りの少い場所を選び、風除けの準備をしてかかるべきであろう。

次にどのように植込むと良いかというところであるが、四尺五寸のビニールを使用すると、七寸角の三条植がトンネル内を

一杯に利用する点から見ても適當のように考えられる。畦幅を広げると兎角両端の株の葉先がビニールに触れて葉焼をおこすおそれがあるし、風の強い時ビニールの両裾に土を寄せて押さえる等の点から見ても両端はややあげるべきであろう。施肥は堆厩



イチゴのトンネル栽培の状況

定植一年目の収穫は見るべきものがないような状態である。このような方法で植付した苺にビニールを被覆したとしても収量が少なくて効果はない。北大中村氏の実験によるとランナーは親株の栄養状態によつて諸性質に影響をもたらすものであるとい

い、大体八月中旬頃迄に、十分施肥した親株から発生したランナーは花梗数も多く植付二年目で経済的収量をあげうるといっている。恐らく七月中に発生し苗を（勿論栄養の良い株から）苗床に移して肥培し八月下旬頃植込むようにすると花梗数も従来の方法より数倍に達するものと考えられる。特にフェアファックスのように一番果の肥大の良い品種は花梗数によつて初期収量に大きな差が出て来るものである。筆者の観察では従来の植付法による花梗発生数はフェアファックスで一・三本、ドルセットで二・二本、東北一号で一・二本であつた。

## ビニールの被覆

苺は低温性作物で温度が少し上ると生育を始めるもので、被覆を早くから始めると、それだけ開花が早められる。

肥等有機質肥料をやや深めに施して乾燥を防ぐようにする事が大切で、大体は秋に施して置くようにする。春は生育の状態を見

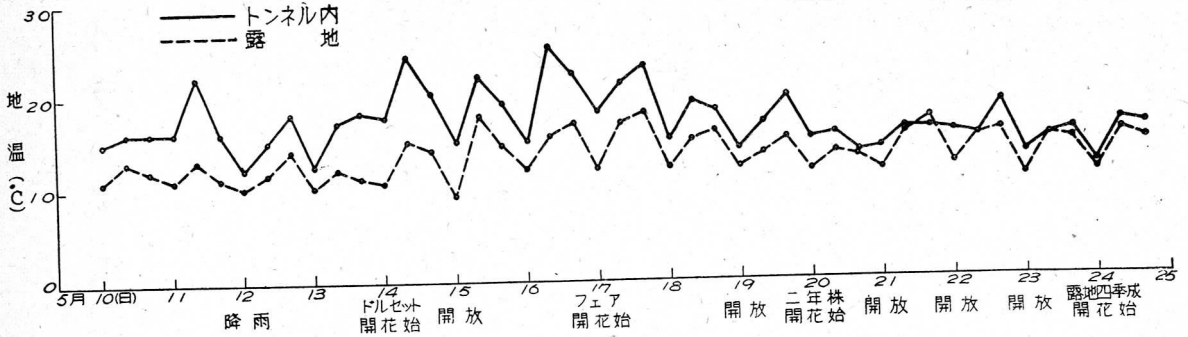
## 苗の取扱

て窒素、加里程度を分けて施せば良い。  
苺苗の定植は従来九月中、下旬、ランナーの生育状態を見て行われているが、先ず

第一表の様に被覆を始めてから例年大体二十日位で開花し始めている。融雪期にも左右されるが融雪早々、出来得れば雪を割つてでも四月上旬にスタートする方が、六月初旬の極めて高価の時に収穫出来る。

第一表 開花期を中心とした地温測定結果

トンネル内と露地の温度差 (平均)  
地温 4.65°C 気温 2.77°C



第一表 トンネル栽培による開花成熟期

年	度	被覆始	開花始	収穫始	露地収穫始め
昭和三十一年	度	四月二十五日	五月十一日	六月十三日	六月二十日
昭和三十一年	度	四月十二日	五月十四日	六月十三日	六月二十五日

トンネルの骨としては根曲竹か割竹を用いて写真のように二尺間隔位にさすと良い。出来れば中央部に一本位竹を結びつけるようにするとかなりトンネルを補強しうる。割竹はやや高くつくが(一本六尺で五十七円位)作業も容易であり、ビニールの傷みも少なくてすむ。

管理

ビニールをかぶせてから開花始迄は、特に外気温が高くなつた場合を除いて換気の必要はない。寧ろ開花前迄は多少徒長気味になつても生育を促進させると約二十日位で開花し始める。開花期に入るとつとめて開放して受精が完全に行われるようにする、開放しなくとも結構受精は行われるが、往々にして奇型果が出来易いものである。

元来トンネル内部は多湿状態にあつて、水分の蒸散は少いように考えられ勝であるが、實際管理に当つて見ると全くその逆でビニールを使用した育苗でも灌水のコツが往々問題になつて位である。従つて開花期頃になるとかなりトンネル内が乾燥して来るので、二、三度たつぷり灌水することも大切な作業である。開花期以後、五月も中下旬になると好天



トンネル栽培のイチゴの収穫

(藤の沢農場)

第二表 収量調査 (昭和三十年藤ノ沢) 二・五坪当

品	種	六月十三日	六月十四日	六月十七日	六月十八日	六月十九日	六月二十日	坪当
ドルセット	スト	11	14	20	22	25	28	100
同右	二生株	11	14	20	22	25	28	100

註 露地ものが出始めた六月二十五日で調査を打ち切った。  
尚販賣価格は平均十八日迄は二〇圓以降八〇圓位であつた。

の日には三〇〜四〇度Cをこすことがしばしばある。三〇度以上の温度は生育に有害で、始終トンネル内の温度に気を配つて換気をはからねばならない。結局この作業は丁度時付の忙しい時なので、風にあおられるのを防ぐのとともに手をあげてしまふ場合が多い。それならば一応開花期迄でビニールの被覆を打ち切つてはどうかという事になるが、今迄の経験では、成熟期が一、二日の差になつて、折角開花迄かなり生育を促進して来たのに殆ど効果がなくなつてしまふ。特別日当りの良いしかも風当りの少ない場所では例外であるが、暖かい日でも夜間だけは被覆するようにすることである。天候の悪い日を除いて殆ど日中開放して夜間被覆しただけでも、地温は第一図の如く一、二度の差が出ている。

その他の管理、敷薬をしくことは勿論で成熟期迄ビニールを被覆するから、トンネル内部の湿度は高いものと見ねばならず、丁寧に買った方がよい。亦年にもよるがハナキリゾウムシの発生する地帯では、トンネル内に集まるおそれがあるのでB・H・Cを撒布して駆除すること等である。

第一図や第二表のようにドルセットがややフェアファックスに優つてゐるようである。特にドルセットは開花数が多いだけ収量も多い。